

広げよう

1 デザインとしての文字

書家・中村不折の仕事を取り返る

今号より「書写の世界を広げよう」と題し、書道博物館（東京都台東区）の鍋島稲子先生に、三回にわたって連載をしていただきます。第一回は、「デザインとしての文字」。

書道博物館の創設者である中村不折がデザインした文字を取り返ります。

1 はじめに

書写の教科書には、「デザイナーと文字」（P71）や「広告と文字」（P80）などのコラムがあり、デザインされた文字の魅力やおもしろさが紹介されています。書道博物館の創設者である中村不折（二八六六〜一九四三）もまた、本や雑誌の表紙、店の看板など、さまざまな場面で文字をデザインしてきました。今回は、不折の仕事を取り返り、デザインされた文字の魅力を探っていきたいと思います。

2 エディトリアルデザインと文字

画家、書家である不折が世に知られるようになったのは、正岡子規（一八六七〜一九〇二）が編集主任を務めていた新聞『小日本』（後に『日本』となる）の挿絵を担当するという機会に恵まれたからでした。当時、文字ばかりの新聞に、ほっと一息つけるような挿絵を入れたいとの思いで、子規が友人の画家・浅井忠に誰かいないかと依頼したところ、中村不折に白羽の矢が立ったのです。

新聞は、多くの人が目にします。それ



▲雑誌『ホトトギス』の表紙。不折の手がけたデザインが斬新で話題となった。

3 広告と文字

まだまだたく無名であった不折ですが、彼の新聞挿絵は線描が力強く、構図もおもしろいと、当時の作家や俳人たちの目にとまり、本や雑誌の挿絵や、装幀などの依頼がくるようになります。不折は子規のおかげで新聞挿絵の分野で開拓者として認められ、この仕事を通じて、多くの文豪たちと交流を深めました。

本の挿絵では、夏目漱石（一八六七〜一九一六）の『吾輩は猫である』、『漱虚集』や、伊藤左千夫（一八六四〜一九一三）の『野菊の墓』などが知られています。若島崎藤村（一八七二〜一九四三）の『若葉集』、『一葉舟』、『落梅集』などは、本のタイトル文字や表紙絵、文中の挿絵まですべてを担当した、いわゆるブックデザイナーとしての仕事をしています。

雑誌の挿絵では、森鷗外（一八六二〜一九二二）が主宰する『めざまし草』を依頼されたのが最初でした。その後、正岡子規が創刊した『ホトトギス』の装幀や挿絵を数多く手がけ、表紙のタイトル文字をまるでマークのようにしたり、文字と絵とを一体化させたりと、斬新なデザインを次々に考案しました。

不折のこうした活動はますます注目を浴び、店の看板やラベル、商品パッケージの文字などを手がけるようになります。

インドカーリーや和洋菓子で有名な「中村屋」の看板は、みなさんが最もよく目にするもののひとつでしょう。また中村屋の羊羹パッケージの文字も、かつては不折が書いていました。「黒光羊羹」などは、黒光りした美しく甘い羊羹を彷彿させるような出来栄えでした。ちなみに黒光とは、夫の

相馬愛蔵とともに中村屋を創設した相馬黒光を指します。当時、中村屋には芸術家や文学者たちが集い、相馬夫妻は彼らに惜しみない支援をしていました。不折もこの中村屋サロンに入りし、多くの人たちと親交を深めました。相馬夫妻は、味のある字を書く不折に、看板文字や商品パッケージの文字を依頼したようです。



▲インドカーリーでおなじみの「新宿中村屋」の看板。目にすることの多い不折の看板文字の一つ。



▲東京都港区にある「大坂家」の看板。江戸時代に創業し、300年の歴史をもつ老舗和菓子店。

他にも東京で見られる看板があります。東京の三田にある「大坂家」という和菓子屋さん。このお店の主力商品「秋色最中」の文字は、今でも不折の書いたものが使われています。ふんわりと空気を含み、パリパリの皮に包まれた、おいしそうな最中を想像しませんか。

また、お酒の好きな方でしたら必ず目にするラベル「真澄」、そして真澄の大吟醸「夢殿」の文字も不折の手によるものです。キリリとした隷書で書かれ、ま

銅島稲子
台東区立書道博物館主任研究員。筑波大学大学院芸術学
研究科博士課程修了。博士(芸術学)。東京国立博物館客員研
究員。大阪教育大学非常勤講師。

価には賛否両論ありましたが、『龍眠帖』は当時ベストセラーとなり、何度も版を重ねたほど話題となりました。百年以上経った今でも、決して古くさくなく、むしろモダンなスタイルに思えるほどです。この新機軸を基に、その後不折は数々のデザイン文字を手がけていきました。

最後に、明治の文人や芸術家たちが不折の文字を心から愛していたことを物語るエピソードを紹介しましょう。森鷗外は不折書のファンで、自分が詠んだ漢詩を作品にしてほしいと不折によく頼みにきていました。そして人生の最期を迎えた鷗外は、「自分の墓は、森林太郎墓と不折に書いてもらうよう依頼してほしい」と書き遺します。不折は、その他に伊藤左千夫、荻原守衛、中村彝などの墓碑銘も揮毫しています。今では当たり前となったデザイン文字のひとつの原型は、不折が生み出し、そしてそれを愛した文豪らによって今日にまで伝えられている。と言っても過言ではないでしょう。

さにキュッと一杯飲みたくなるような気分させてくれる文字です。

看板の文字は、そのお店の「顔」ですから、まずはわかりやすさ、親しみやすさが一番です。しかし、ただわかりやすいだけでは、人の気持ちを惹きつけることはできません。やはり、看板が個性的であることも重要な要素です。その点、不折の文字には、人の目を捉えて離さない独特な魅力があります。

そして商品パッケージの文字は、購買意欲をそそるものでなくてはなりません。先に述べた和菓子やお酒のパッケージがその好例であり、商品の特徴やおいしさが直に伝わってくるような雰囲気のある



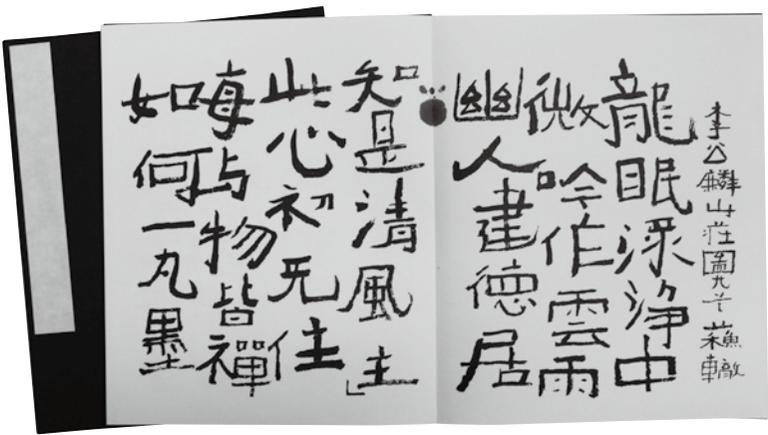
▲「大坂家」の看板商品「秋色最中」のパッケージ。見事なバランスで文字が配置されている。

文字で書かれています。

不折には、こうしたデザインとしての文字を自在に操る稀有な才能がありました。これらの文字の多くは、明治四十一年(一九〇八)、不折が書道界にデビューする契機となった『龍眠帖』という作品をベースにしています。当時、不折が神経病にかかり、そのリハビリとして書いた習作です。それまでの不折書には見られなかった斬新な書風に、友人であり俳人の河東碧梧桐(一八七三～一九三七)が驚き、出版して世に送り出しました。楷書と隷書とを織り交ぜた素朴な書風に不折の個性が折り重なった、不折書の新機軸でした。この書の評



▲人気の日本酒「真澄」の文字は、目にしたことがある人も多いだろう。



▲『龍眠帖』 明治41年(1908)複製

さまざまな文字にふれよう

～書道博物館のご案内～

今回ご紹介した中村不折が創設した書道博物館には、中国及び日本の書道研究における貴重な資料が数多く収蔵されています。

展示会ごとにギャラリートークを開催しており、展示資料を見ながら、銅島先生が詳しく解説してくれます。事前に予約すれば、小・中学生対象の「キッズセミナー」も開催してくれるそうです。

現在開催中の企画展は「唐時代の書、徹底解剖!!」(～6月16日まで)。唐の四大家をはじめ、唐時代を代表する書の名品、そして貴重な肉筆資料である敦煌写経など、唐時代の華やかな書の数々をご紹介します。ぜひ、ゴールデンウィークなどを利用して、見に行かれてはいかがでしょうか。



台東区立書道博物館

■入館料：一般 500円(300円) 小・中・高校生 250円(150円)
※()は20人以上の団体料金

■開館時間：9:30～16:30(入館は16:00まで)

■休館日：月曜日

■電話：03-3872-2645

■アクセス：JR鶯谷駅から徒歩5分

■HP P：<http://www.taitocity.net/taito/shodou/index.html>